

# 年行事と習俗からみる長崎華僑の特色

法政大学 曾士才

## 1. 日本華僑独自の民俗文化とその担い手

日本華僑の歴史は1858（安政5）年に幕府が欧米5か国と通商条約を結び、翌年開国した時から数えると2017年で159年になる。この間、日中両国の関係に翻弄されながらも、華僑は日本各地に根付き、地元社会と共生関係を築くようになった。しかし、異郷の地にあつて、華僑どうしの相互扶助と結束を図るために、華僑人口が多い東京、横浜、名古屋、大阪、神戸、函館、長崎では同郷団体も兼ねた同業団体が次々に設立された。また、これらの同郷同業団体を束ね、当該地域の華僑社会全体を統括する自治組織・中華会館が、横浜（1867年）、神戸（1892年）、函館（1910年）に成立していった。横浜、神戸の中華会館は先の大戦で焼失し、元の建物が現存するのは函館のみである。3つの会館とも中国の廟觀に類する建築様式で、三国時代の武将関羽を主神として祀っていた。

函館中華会館は普段は入ることができないが、2010年9月に函館中華会館創建100周年記念の特別公開時に、筆者は内部に入ることができた。外壁はレンガ積みで、木骨組の瓦葺きという純中国式の建物で、釘一本使用していない。内部は3室に分かれており、重厚な作りだが、各所に細かな装飾が施されていた。会館は会議や親睦のために使用されたが、中央の部屋の祭壇には「勅封三界伏魔大帝至聖武成夫子關聖帝君之位」と書かれた関帝の位牌が祀られていた。戦後、自治行政的機能は新たにできた華僑総会が担い、中華会館の機能は関帝などの民間祭祀、中華義荘（共同墓地）の管理運営、葬儀の執行に縮小した。しかし、中華街とともに、今日においても民俗文化伝承の磁場の役割を担っている。

日本華僑社会における民俗文化の担い手は個々の家庭と同郷同業団体であり、方言集団ごとにローカルな民俗文化が伝承されてきた。しかし、戦後になると華僑を取り巻く環境が大きく変わり、日本社会への同化が進んだ。職業も多様化し、70年代に入ると、結婚相手も大多数が日本人となった。高度経済成長期に入ると、日本人と同様に結婚式場で結婚式を挙げ、葬儀も葬儀社主導が一般的になった。しかし、行事や儀礼の細部をみると、日本の要素と中国の要素とが溶け合った日本華僑独自の民俗文化が生れている。

## 2. 民俗学からみた日本華僑の特徴

前史を含めると、近現代につながる日本華僑社会が成立するのは1600年ごろ、江戸時代初期の長崎唐人貿易時代以降のことである。幕府のキリシタン禁教により、仏教徒であることを誇示する必要から、出身地ごとに唐人商人たちは寄進をして禅宗寺院を建立し、自らの檀那寺とした。いずれも隠元禅師が開いた黄檗宗の寺院だが、当時は同郷団体の機能も果たしていた。1623年建立の興福寺（江蘇、安徽、江西、浙江などの三江地方）、1628年建立の福濟寺（福建南部）、1629年建立の崇福寺（福建北部）では、停泊中に船からお寺に航海の女神・媽祖（まそ）を預ける菩薩預り（ボサあずかり）や中国式の年中行事、葬礼、祭礼が行われた。明治以降は菩薩預りこそなくなったが、長崎には媽祖を祀る伝統が今も受け継がれている。



写真1：興福寺に到着した菩薩預かりの一行。ランタンフェスティバルの皇帝パレードで再現されている。2007年2月25日筆者撮影。

民俗学からみると、日本華僑には2つの特徴がある。1つは、東南アジアの華僑・華人社会と比べて人口規模が小さいため、移住先である日本の民俗文化、民俗信仰との混交、習合がみられる点である。たとえば、神戸市兵庫区にある松尾稲荷神社は楠木正成ゆかりの神社で、最後の出陣の前に太刀を奉納し、戦勝祈願をしたと伝えられている。明治大正の頃は船着き場にあったため航海の神として地元の漁師たちの信仰が篤く、昭和に入ると福原遊郭に近いことから商売繁盛、縁結びの神として信仰を集めた。霊験が類似しているうえに、神社名が媽祖の福建語マツォに似ていることから神戸に上陸した華僑一世の人たちが寄進し、篤く信仰してきた。戦後、華僑の職業の多様化により、親の代ほど寄進に熱心でなく

なったが、今も参詣する人は絶えない。

また、青森県下北郡大間町にある稲荷神社では、稲荷大神（農耕神ウカノミタマ）だけでなく、金毘羅大権現、弁財天とともに江戸時代から天妃媽祖大権現も祀っている。毎年7月第3月曜日の海の日（1995年までは茨城県那珂湊から勧請した7月23日だった）、御神楽をのせた船を沖に出し、御神酒で清めた海にお札を沈める「お札入れ」をし、大漁を祈願したのち、神社前から神輿に乗せられた天妃像が弁財天像とともに巡行が行われている。巡行行列には大間の中学生たちの龍踊りも加わっており、爆竹を鳴らしながら町内を練り歩く。行列には、台湾から駆け付けた信者たちも加わっている。

2つ目の特徴は華僑の日本への同化が進み、日本の民俗との習合がみられる平面、方言集団ごとの違いも残している点である。特に長崎や九州一円に多い福建北部出身者が故郷の民俗信仰を最もよく伝えている。他の方言集団が港湾都市に定住する傾向があるなか、福建北部出身者は戦前までは呉服行商を営み、移動性が最も高い集団であった。彼らは集団としての分散の危機にあって、お盆などの年中行事をともに過ごすことによって、集団としての結束力を維持、強化し、潜在的危機を乗り越えてきたためではないかと考えられる。

### 3. 横浜華僑の年中行事

1949年に刊行された内田直作『日本華僑社会の研究』によれば、3つの中華会館では、正月元旦、天后（媽祖）誕生日、清明節、端午節、関帝祭（関帝の誕生日）、中元節（盆行事）、中秋節、冬至には神々に三牲（鶏、豚、魚）、酒、菓子、元宝（紙銭）を供え、蠟燭を灯し、線香をあげるとある。しかし、時代とともに儀礼が簡略化し、省略されるようになった。たとえば、函館では清明節と中元節に華僑墓地に参拝する以外ほとんど行われなくなっている。

一方、横浜中華街や神戸南京町の春節祭、長崎新地中華街のランタンフェスティバルなどのように、中華民国期に入り新暦を採用したために、民間でも次第に廃れていった旧暦の正月行事が、80年代中頃から町おこしのイベントとして復活している。

表1は横浜華僑の祭事・行事をまとめたものである。清明節、中元節、冬至は観光客とは無縁の祭事である。清明節と中元節は中区大芝台7番地にある横浜中華義荘内で行われる。義荘内にある地藏王廟と中華公墓（合葬墓）の前で仏光山の尼僧たちによって法要が営まれるが、参加者は中華会館の役員、信者、遺族だけである。冬至の行事も同郷会館で関係者だけで行われる。これ以外の行事は、

横浜中華街発展会協同組合などが中心となって行われている中華街の町おこしのイベントである。また、1949年中国大陸に中華人民共和国が誕生し、祖国に2つの政権ができたため、横浜では1952年に学校事件が発生し、華僑学校が2つに分裂してしまい、横浜華僑社会は大陸政権支持派と台湾政権支持派とに分裂してしまった。しかし、両者の協力のもと1989年に関帝廟が復興されたのを契機に、対立から融和へと大きく転換した。国慶節と雙十節という2つの建国記念日の存在は横浜華僑社会を二分してきた象徴ともいえ、現在でも獅子舞の門付けは大陸政権支持派、台湾政権支持派に分かれて別個に行っている。しかし、近年は1つの店先に国慶節と雙十節のポスターが並んで貼られることも見られるようになった。こうした融和ムードのなか祝賀パレードや獅子舞の門付けは観光客の目を楽しませる行事となっている。

表 1. 横浜華僑の祭事・行事 (2015年)

行事名	日付	内容、場所
迎春カウントダウン	12月31日	関帝廟隣の横濱中華學院校庭と媽祖廟でカウントダウンが行われ、獅子舞が演じられる
春節	2月19日～3月5日 (旧1月1日～1月15日)	前日18日深夜、関帝廟と媽祖廟でカウントダウン、19日「採青」、期間中の土日祝日山下町公園で「娯楽表演」の披露、28日(土)「祝舞遊行」、最終日3月5日媽祖廟で「元宵節燈籠祭」
媽祖祭	3月21日	媽祖廟で開廟9周年を祝う神事・新生児成長祈願に続き、中華街で媽祖の神輿巡行
清明節	4月5日	中華義荘内の地藏王廟と中華公墓(無縁仏を埋葬)前に臨時に設置された祭壇で法要。一般の参拝者は墓や安骨堂に参拝
端午節	5月5日	中華街の各店舗で各種のちまきが売られる。旧暦5月5日に近い週末に山下公園前海上でドラゴンボートレース開催
媽祖誕	5月11日 (旧3月23日)	媽祖廟で媽祖の誕生を祝う神事
良縁祭	7月7日	七夕のこの日、縁結びの神様「月下老人(げっかろうじん)」像に良縁を祈願する
関帝誕	8月8日 (旧6月24日)	午前中、関帝廟で関帝の誕生日を祝う神事。午後から中華街で関帝の神輿巡行

中元節	8月17日（旧7月14日）	中華義荘内の地藏王廟と中華公墓前の祭壇（臨時に設置）で法要。一般の参拝者は墓や安骨堂に参拝
中秋節	9月27日	中華菓子店で各種の月餅が売られる
国慶節	10月1日	中華人民共和国の建国を祝うパレードが中華街であり、慶祝の獅子舞の門付けがある
雙十節	10月10日	横濱中華學院校庭で中華民国の建国を祝う民族芸能演技、慶祝式典。午後から中華街で祝賀パレードと獅子舞の門付け
媽祖昇天の日	10月21日（旧9月9日）	媽祖廟で、媽祖が天に昇り、神として祀られた日を祝う神事
冬至	12月22日	一年の締めくくりに同郷会館で祖先を祀り、参拝者で会食

#### 4. 地域色を残す長崎華僑の年中行事

横浜とともに日本三大中華街と呼ばれる長崎や神戸の年中行事でも、横浜と同じように、出身地の地域色よりも中華色を前面に出し、イベント化する傾向がある（曾2005, 曾2009）。一方、主に福建人で占められる長崎華僑の場合、現在でも地域色が色濃く残っている点が特徴である（表2参照）。たとえば、旧暦1月29日の過九節（福建のことばでアウアウ）である。9歳、18歳と9の倍数の年齢



写真2：旧暦7月28日の夜、長崎の普度蘭盆勝会の三日目、大施餓鬼法要が営まれる。導師が呪文を唱え、饅頭を餓鬼たちに食べさせる。2007年9月9日筆者撮影。



写真3：三十六軒堂。死者があので買い物をするための商店街。唯一長崎崇福寺のみで見られる。2007年9月9日筆者撮影。



写真4：2017年の福首を務める慶華園の楊爾嗣さん（手前）、天天有の官龍政さん（後ろ）。2017年9月16日筆者撮影。

や9がつく年齢の人が過九粥を食べて厄払いをする。元来は家庭で行う習慣であったが、30数年前から華僑総会が該当者を招待し、市内の料理店で行われている。この日には必ず甘いフルーツ入りの粥を食べさせることになっている。なお、近年、招待対象は日本の厄にあたる人や古稀の人にまで広がっているようだ。

しかし、一番の特色は福建北部と福建南部を中心とする組織が、それぞれ別個に行事を営んでいることである。崇福寺で行われる関帝祭（旧1月13日）、燈籠祭（旧1月15日）、清明節、媽祖祭、普度蘭盆勝会（旧7月26日～28日）は福建同郷会（福建北部の福清県、福州市出身者の組織）のメンバーで、商売を営む世

表 2. 長崎華僑の伝統行事 (2007年)

行事名旧暦月日 ( ) 内は新暦	摘 要
春 節 1月1日	(ランタンフェスティバル初日)
関聖帝君飛昇 1月13日	命日。崇福寺関帝祭○
元宵節 1月15日	新地町、燈籠祭崇福寺○、唐人屋敷● (ランタンフェスティバル最終日)
過九節 1月29日	市内飲食店
福德正神千秋 2月2日	誕生日。唐人屋敷土神祭●
崇 福 寺 (清明節)	崇福寺展墓○
観世音菩薩仏辰 2月19日	誕生日。唐人屋敷観音祭●
国際墓地清明 3月2日	国際墓地展墓
天上聖母聖誕 3月23日	崇福寺媽祖祭○、唐人屋敷媽祖祭●
関聖帝君聖誕 6月24日	崇福寺関帝祭○、唐人屋敷関帝祭●
普度蘭盆勝会 26日 7月27日 28日	施餓鬼(中国の盆)○
中秋節 8月15日	
大成至聖孔子聖誕 8月28日	孔子生誕2557周年祭
国慶節 (10月1日)	建国記念日

注 担い手：○福建同郷会系、●福建会館系

帯が中心になって一年交代の輪番制で行っている(表3参照)。一方、江戸時代の唐人屋敷跡で行われる燈籠祭、土神祭(旧2月2日)、観音祭(旧2月19日)、媽祖祭、関帝祭(旧6月24日)は福建会館(福建南部出身者が主体)が運営している。このように長崎では、行事内容や行事の担い手において、地域色が色濃く出ている。

表3は崇福寺で行われる中国系の年中行事の当番となる華僑のお店の輪番表である。年中行事の準備、運営を1年間担当する年当番のことを正式には福首というが、一般には当頭(ドンタウ)またはアタマさんと言い習わしている。

1980年までは長らく70軒が7年周期で分担してきたが、華僑の職業の多様化、後継者難などにより、廃業するお店が次第に増え、80年代は60軒6年周期、2005年には44軒5年周期になっている。ところで、7年周期というと、諏訪大社のおくんちの踊町を連想してしまうだろう。

表3. 崇福寺年当番(福首)の輪番表(2005年作成)

2005年 8軒		2006年 9軒		2007年 8軒		2008年 9軒		2009年 9軒	
京華園	中華	江山楼	中華	新和楼	中華	福寿	中華	慶華園	中華
三角亭	中華	福建	菓子	美有天	中華	桃華園	中華	泰安洋行	雜貨
四海楼	中華	錦昌号	花火	林義盤	(菓子)	永盛楼	中華	白樺	喫茶
宝来軒	中華	大華飯店	中華	林貽溪	(フォト)	宝来軒別館	中華	康楽	中華
蘇州林	中華	三海楼	中華	郭定儀	(中華)	福州天天有	中華	中国鍼灸院	鍼灸
潘三津	(中華)	新民楼	中華	林猛	(菓子)	一品香	中華	天天有	中華
三成号	中華	共楽園	中華	南風	(喫茶)	龍亭	中華	瑞泰号	中華
天宝閣	中華	鄭文忠	(中華)	万園	中華	村上眼科(雜貨)		中国楼	(中華)
北京飯店(中華)		喜楽園	中華			潘從發	?	鄭月琴	(製麵)

注 (××) : 2007年調査時点で廃業ないし休業していることを示す。  
 村上眼科(雜貨) : 1階で雜貨、2階で眼科開業。

## 5. 長崎くんちと楊正和・楊爾嗣親子

長崎くんちは長崎市民の氏神、鎮西大社諏訪神社の祭礼行事であり、国の指定重要無形民俗文化財にも指定されている。毎年10月7日から3日間、町を挙げて催される。江戸時代、長崎の市街地は77ヵ町あり、それを7分割して1ヵ町が7年に一度踊りを奉納し、その当番町を“踊町”と称した。その後の町の再編成などで町名や町数は変わったが、7年一巡制は今日も踏襲されている。この長崎くんちに深くかかわったある華僑の親子がいた。

父親の楊正和さんは1918年佐世保生まれ。小学校時代には中国人ゆえにいじめられることがあったが、いじめた同級生をしかる担任教師に心が救われたという。1932年上海事変で郷里へ引き揚げたが、34年単身で佐世保へ来て、36年には四海楼で働くようになった。戦時中は、日本の役に立てればと鉄工所で働くが、特高警察官による拷問にあったこともある。終戦後、連合軍が調査に来たが、拷問のことは一言も言わなかった。なぜなら、今の自分があるのも日本人のおかげなので、悪く言うことはできなかったという。

戦後の1948年、麴屋町で中華料理店・慶華園を日本人と共同経営し、52年には単独で経営するようになった。2000年は麴屋町が踊町であったが、麴屋町の出し物は傘鉦と川船であった。楊正和さんは80年代の麴屋町自治会副会長を務めており、くんち本番中は山高帽に紋付袴姿で、出し物行列の先陣に立った。

一方、長男・楊爾嗣(ちかし)さんは1950年生。幼い時からくんちが大好きで、

2001年からは市民団体「長崎くんち塾」の塾長になるほど、くんちについて深く勉強している。ところで、楊爾嗣さんは、1984年には川船を引く根曳き22人のうちの1人に、93年には根曳き頭に、2000年には指揮を執る長采(ながざい)になった。「自分は諏訪神社の氏子という意識はあったが、中国人である自分が長采になってよいのか悩んだ」という。周りの人たちが背中を押してくれたので、意を決して長采を引き受けることになった。一般に日本の氏子組織、檀家組織に外国籍のままで受け入れられることがないなか、楊爾賢さんが川船の長采という年中行事の重要な役を務められたことは画期的なことであった。

## 6. まとめ

多様性と共生に向けての社会のあり方、人びとの処し方について、社会学者の奥田道大は『『国際的』とは外国語が話せ、欧米流の生活を送ることではない』、まずは「心の溝」を取り払うことだと述べている [奥田1997]。彼によると、①成熟した都市型社会に生きる人びとには共生の作法、つまり異質・多様性を認め合う異質性への許容度 (Decency: 親切さ、寛大さ) がある、②現実には微妙な間合いと境い目をたどる住み合いを持続させるなかで、共生へと構造化されていく、③多様性にむけてのインテグレーション (集積) が必要である、という。解り易く言うと、ライフコースの節目 (入学、結婚、就職等の人生の出来事) に際して、エスニシティの故にその人が不平等な差別を受けたと自覚した場合、その社会は未成熟であるという。そして、成熟した社会になるには、相当の時間と試行錯誤を経なければならないということである。

以上のことから、年中行事と習俗からみる長崎華僑の特色は、①福建色 (方言集団別) を色濃く残しつつ、長崎との高い親和性 (行事の輪番制など) が認められる点、②楊親子の事例に見られるように、唐人貿易時代から400年かけて成熟した国際都市となった長崎だからこそ、華僑はありのままの自分を表出しながら、長崎人として受け入れられている点にあると言える。

## 参考文献

王維 (2001)

『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ—祭祀と芸能を中心に』 風響社

奥田道大 (1997)

『都市エスニシティの社会学—民族／文化／共生の意味を問う』 ミネルヴァ書房

曾士才 (2005)

「在日華人社会の民俗文化」『華人社会がわかる本—中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化』明石書店

曾士才（2009）

「華僑の民俗信仰」『日本の民俗信仰』八千代出版

高橋晋一（1999）

「日本華僑社会における中国伝統文化の持続と変容—北海道函館市の事例より」『民俗宗教の地平』春秋社

新聞記事

「国際交流14 ふるさと人日記〈299〉」『長崎新聞』1990年8月16日